

「ツアラトウストラの歌」

ニーチェ 一八八三—一八八五

河内信弘訳

夜の歌

夜である。

あふれでる噴水は、今、みな声を大きくする。

わたしの魂もあふれでる泉である。

夜である。

愛するものたちの歌が、ようやく今、みな目を醒ます。

わたしの魂も愛するものの歌である。

わたしのうちに、癒されないもの、癒しがたいものが

あり、

それが声をあげようとす。

うちに愛を求める渇きがあり、

それは愛の言葉をあげる。

わたしは光である。

ああ、わたしが夜であったなら。

光りは、帯のごとく、わたしを締めあげる。

これがわたしの孤独。

ああ、このわたしが暗く、夜のようにであったなら。
光の乳房を口にふくんで飲むものを。

与えられることを待つ目、憧れの夜が明るいこと、
これがわたしの嫉妬だ。

わたしはお前たちを祝福しなかった。

ああ、与えるもの、そのすべてに与えられた不幸。

天上にきらめくちいさな無数の星の、光を放つ虫の、

ああ、わたしの太陽の暗さ。

お前たちを。

ああ、情欲への欲情。

—お前たちの光りの贈り物からこの上ない喜びをえた

ああ、飽食のなかで焼けつく飢え。

かった。

かれらはわたしから受け取るが、

けれど、わたしはみずからの光のなかに生き、

かれらの魂にわたしは触れているだろうか。

みずから吐き出した炎をまた吸い込む。

与えるものと受け取るもの間に溝があり、

受け取ることの幸せをわたしは知らない。

そのわずかな隔たりに橋をかけるのは難題だ。

盗むことのほうが受け取ることよりはるかに幸せだろ

飢餓がわたしの美のなかから育って行く。

うと

光を与えたものたちをわたしは痛めつけてやりたい、

しばしば夢をみる。

わたしが与えてものを奪い返してやりたい。

—わたしは悪意に飢えている。

わたしの手が休むこともなく与え続けていること、

これがわたしの貧しさであり、

もうすでにかれらの手が差し出されているというのに、

落下しながらためらう滝の落下のように、
手を引っ込める。

―わたしは悪意に飢えている。

このような復讐がわたしの充実から生まれ、
このような悪巧がわたしの孤独から生まれる。

わたしの贈るといふ幸福は贈るといふことで滅び、
わたしの徳は過剰のゆえに自分の徳に厭きてしまった。

絶えず贈り続けるものの危険は、
羞恥を失うこと。絶えず分け与える者は、
手も心も、与え過ぎて、たごができる。
請い願うものたちのあわれな姿にも

目はもう涙を浮かべない。
震える手にもわたしの手は固くなり過ぎた。

わたしの涙は、
こころの柔らかなうぶ毛は、どこへ消えたのか。

ああ、贈るもの、そのすべてに与えられた孤独。
ああ、輝くもの、そのすべてに与えられた寡黙。

多くの太陽は荒涼とした空間をめぐる。
暗く漂うものに太陽は光をもって語りかける。
―だが、このわたしには黙している。

ああ、これが輝くものへの光の敵意。
声ひとつかけずに光りは軌道をめぐる。

輝くものに対してこころの奥底では不当に、
太陽に対して冷酷に、――
こうしてそれぞれの太陽はめぐる。

嵐に似てそれぞれの太陽はそれぞれの軌道を飛んで行
くが、
それがそれぞれのありかたである。
それぞれの太陽はそれぞれの容赦ない意志にしたがう
が、

それがそれぞれの冷酷さである。

―話せという要求が。

ああ、闇のものよ、夜のごとく暗いものよ、おまえたち
ちははじめてなのだ、

夜である。

まず輝くものから温もりを作り出すのは。

あふれでる噴水は、今、みな声を大きくする。
わたしの魂もあふれでる泉である。

ああ、光の胸から、

乳を飲み、慰めを飲むものは。

夜である。

ああ、わたしを氷がつつま、

愛するものたちの歌が、ようやく今、目を醒ます。
わたしの魂も愛するものとの歌である。――

手は凍れるものに触れて火傷する。

ああ、おまえたちの渇きにこがれて、喉が渇く。

ツアラトウストラはこう歌った。

夜である。

踊りの歌

ああ、わたしが光でなければならぬとは。
夜のように暗いものに飢える。

孤独。

ああ、生よ、この前、おれはおまえの目をのぞきこん
だ。

夜である。

底知れない深みにひきこまれるようだった。

噴水のように、今、わたしから要求が噴き出る、

だが、金の針で釣り上げてくれたね。

おまえは底が知れない、と言ったら、ふんと笑った。

おまえは言った、「魚はみんなそう言うわ。

『底にたどりつけないものは、底が知れない』って。

わたしはただ気が変わりやすくて、乱暴で、

つまり女ということ、品行方正なんかじゃないわ。

たとえあなたがた男の方から、わたしが〈深遠〉だと

か、

■貞淑〈だ、〈永遠〉だ、〈神秘〉だとか言われてもね。

でも、あなたがた男の方は

いつもご自分の徳をわたしたちに贈って下さる。

―あなたがたは徳が高くていらっしやるから。』

こう、生は、信じられない女は、笑った。

もっとも、この女が自分を悪く言うときは、

おれはその言うこともその笑いもまったく信じない。

おれの手を負えない「知恵」と

ふたりっきりで話したとき、知恵は怒って言った、

「ほしい、自分のものになりたい、好きだ、

それだけの理由であなたは生を褒めているだけでしょ」と。

怒った女に、おれは気分を害して

危うく真実を話してしまうところだった。

「知恵」に「真実」を話すほど、

意地の悪いことはないのに。

つまりおれたち三人はそんな関係なのだ。

心底おれは生が好きなのだ

―しかも、憎んでいるときこそ、たぶん、もっとも好きなのだ。

おれが知恵に好意を抱き、しかもときどき持ち過ぎる

のは、
知恵が生を強く思い出させるからだ。

唇を噛んで、櫛で毛を逆立てているのを
おれはよく見たものだ。

その目、

その笑い、おまけに金の釣竿も持っている。

知恵というのは意地が悪くて、信用がおけない、
つまり女ということだ。

ふたりはそっくりだ、おれはどうすればいい。

でも、知恵が自分のことを悪く言うとき
いちばん男心をそそるね。」

いったい知恵とはどんな方かしら、

と、あるとき生はおれにたずねた、

こう生に話したら、

「おれは熱くなって言った「ああ、うん、知恵ね。

意地悪そうに笑うと目を閉じて言った。

知恵にあこがれ、知恵にあきることもない、

「誰のことを言っているらっしゃるの。きっとわたしの
ことですよ。」

ペール越しにしか見えないし、直接捕まえようとしても
出来やしない。

あなたの言うことが正しいとしても、
面と向かっておっしゃるなんて。

知恵はきれいかって。知るものか。

でも、こんどはあなたの『知恵』という方のことも話
してくださいな」

でも、どんな世慣れたものでも知恵なら誘われる。

知恵は気分屋で、しかも強情だ、

おまえはふたたび目を開いた

ああ、愛する生よ。
底知れないおまえの目のなかにおれはふたたび落ちて
いくようだった。

ツアラトウストラはこう歌った。

墓の歌

向こうに墓の島がある、寡黙な島が。

わが青春を葬ったいくつもの墓もそこにある。

島へ常に緑の艶やかな生の花冠を運ぼう。

私はこのように思い定めて海を渡った。――

ああ、わが青春の幻影と面影。

ああ、青春の愛しいまなざしのことごとく、神々しき
時のことごとく。

なんと足早におまえたちは滅んでしまったことか。

縁あった死者たちと同じようにわたしはお前たちを偲
ぶ。

お前たち、わがもっとも愛した死者たちから
甘い香りがわがもとにたちゆらぐ。

こころを溶かし、涙を溶かすその香り。

その香りが舟をこぎ行く孤独なひとびとのこころを
まことに、ゆさぶり、解きほぐす。

今もお私はもっとも豊かで、羨やましく思われてい
い。

――もっとも孤独な、この私が。

なぜなら私がお前たちを抱いたのだった、そして今も
なお、お前たちが私を抱いてくれる。

私に落ちて来たように、赤いバラのようなリングが誰
のところへ落ちるだろうか。

今なお、私はお前たちの愛を相続するものであり、育

てる土壌である。

ああ、もっともわが愛する者たちが、

色とりどりの野に育った徳を偲ぶために咲いている。

あいらしい、今は遠い奇跡よ、

我々は親しくあるようにつくられていた。

鳥のようにおすおすとしてではなく、

— そうだ、信頼する人が信頼する人のもとにやってくるように、

私のもとに、私の飢えて苛立つ心のもとにやって来た。

たしかに、私と同じように、信頼をむすぶように、

優しい永遠と結ぶように作られていたのに、

今は滅んだその不実のゆえにお前達を

神々しい眼差しであり刹那であると呼ぶほかはなく、
ほかに呼ぶ名を私は知らない。

まことに足早に、逃亡者よ、お前達は私のもとを去った。

いや、私から逃れたのはお前達ではなく、この私がお前達から逃れたのだ。

我々はお互いにその不実に罪はない。

私を、私を殺すために、あいつらがお前達を

私の希望の小鳥たちを絞め殺した。

— そうだ、悪意が、いつもお前達を狙って、矢を放っていた。

— 私の心を射抜くために。

そして、悪意は命中した。

しかし、お前たちは変わることなく私の最愛のものであり、

私の所有であり、ひたむきの存在であった。

だから、だから若くしてお前たちはあまりにも早く死ななければならなかった。

私の所有するもっとも傷つきやすいものを狙ってあいつらが矢を放ったのだ。

ねらったのは、うぶ毛のように柔らかな肌の、それどころか、

視線を受ければ死ぬ笑みを浮かべる、そんな肌のお前達であった。

だが、私の敵どもに言ってやりたい。

お前らが私にしたことに比べたら、

あらゆる人間を殺戮してもそれがなんであろうかと。

お前らはこの私に、あらゆる人間を殺戮すること、それ以上の悪いことをした。

お前らはこの私から取り戻すことの出来ないものを奪ってしまった。

—だから、お前らを私の敵と呼ぶ。

私の青春の幻を、愛すべき奇跡を、

お前らは殺してしまった。

私の遊び友達、幸せの聖霊たちを、お前らは奪ってしまった。

その思い出に

この花冠とこの呪いを供えよう。

ああ、わが敵よ、お前らにこの呪いを供えよう。

旋律が、寒夜に砕けて、絶えたように、

お前らは、私の永遠をつかの間のものにしてしまった。私の永遠は、神々しい両眼で見上げるか見上げないかのうちに、

私のもとを通り過ぎていった—まるで一瞬のようだった。

かつて好ましいときに私の純粹さが言ったものだ、

「あらゆるものは神聖なものでなければならぬ」と。

するとお前らは汚らしい幽霊を引き連れて私を襲った。ああ、素晴らしかったあのころはどこへ消えたのか。

「日々は厳かなものでなければならぬ」

かつて私の青春の叡知はそう言った、

たしかに、楽しい叡知の言葉だ。

だが、そのときお前らは、敵どもめ、私から夜を盗み取り

不眠の苦痛に売り渡した。

ああ、あの楽しい叡知はいまどこへ逃げて行ったのか。

かつて幸運の占いが出ることを強く願った。

するとお前らは不愉快なフクロウの怪物を私の道の行く手に連れだした。

ああ、私の優しい強い願いはどこへ逃げて行ったのか。

もう嘔吐はしないとかつて私は誓った。

するとお前らは、私の身近な人々を、親しい人々を膿んだものに変えてしまった。

ああ、私の貴い誓いはどこへ逃げて行ったのか。

かつて幸せの道を盲目の者として私は歩いた。

するとお前らは盲目の者が歩む道に汚物を投げ込んだ。

そして今は昔の盲目の道にかつて言いた者が嘔吐した。

私に与えられたもっとも困難なものを成し遂げ、

私の克服の勝利を祝ったとき、

私をもっとも愛する者達に、もっとも災いあることをしたのは、

この私だと叫ばせたのだ。

これが、なるほど、お前らのやることだった。

お前らは私の最良の蜂蜜の味を変えて食べられなくし、最良の蜜蜂の勤勉を台なしにしてしまった。

私の慈悲を当てにして、お前らが、いつも送ってよこすのは

厚かましい乞食どもであった。

私の同情を求めて、お前らのお陰で、押し寄せてくるのは

直る見込みもない恥知らずどもであった。

そうしてお前らは信ずるところにしたがって私の徳を

だいなしにしてしまった。

それでも私はわがもつとも神聖なものを犠牲に捧げた。すると素早くお前らの「敬虔さ」は脂ぎった供物を添えた。

こうしてお前らの脂の煙りの立ち込める中でさらに私のもつとも神聖なものは窒息してしまった。

かつて私は、まだ舞ったことのないように、舞ってみたいと願った。

七つの天をも越えて舞ってみたいと願った。

するとお前らは私の最愛の歌い手を説き伏せてしまった。

その歌い手は今不愉快に、鬱陶しく歌いだした。

ああ、私の耳には陰鬱な角笛のように響く。

凶悪な歌い手、悪意の手先。

実に無邪気な男。

すでに私は最上の舞いを舞おうと踏み出そうとしていた。

そのときその男はその歌でこの恍惚の喜びを打ち殺してしまった。

最上の比喩はただ舞うことによつてしか語る事ができない。

そのことを私は心得ている。

—そして、私の最上の比喩は語られないままに私の手足に今も残ったままである。

語られず、救い出されず私の最後の希望は残されたままだった。

わが青春の面影、慰め、

そのすべては死んでしまったのだ。

それにどのように耐えたらいいのか。

そのような傷をどのように癒し、克服したらいいのか。この墓場からどのように再び私の魂を蘇らしたらいい

のか。

そうだ、私には、たやすくは傷つかない、葬りさることの出来ないものがある。

岩をも砕くものがある。それは私の意志である。

私の意志は黙々と歩み、歳月を貫いて変わることはない。

私の意志は私の歩みに乗って歩もうとする、

私のなじみの意志は。

その意志の思うところは堅固で不死身である。

私はアキレウスとは違って踵だけは不死身である。

今もお、もっとも辛抱強きもの、お前は、踵に生きて、変わらない。

今もおお前はあらゆる墓を潜り抜けてくる。

お前の中にはなおも青春の解き難きものが生きている。

お前は、命あるものとして、青春として希望を抱きな

がらここに座っている、

黄色く色づいた瓦礫となった墓の上に。

そうだ、お前はあらゆる墓を打ち砕くものである、そう私は思う。

私の意志よ、お前の幸せを祈る。

墓のあるところにだけしか、生き返ることもないのだから。――

ツアラトウストラはこう歌った。

もうひとつの踊りの歌

「ああ、この前のこと、生よ、おれはおまえの目を見つめた。

おまえの夜の目に金色がゆらゆらとゆらめいていた。

――その快樂におれの心臓はとまった。

―夜の水の面に金の小船が
ゆらゆらとゆらめいていた。

沈んでゆく、溺れて消える、また浮かんで手招きする
揺れる金の小船が。

脚に、踊り続けるおれの脚に

おまえはちらりと視線を送ってよこした、

笑うような、問うような、蕩かすような

揺れ動く視線を。

おまえが可愛い手でカスターネットを二度鳴らす

―それだけでもうおれの脚は踊りだす―

おれの足はつま先立をして、

つま先はおまえの言うことを聞こうと聞き耳を立てる。

踊るものは、そう、―つま先に―耳を持つ。

おまえを捕まえようと飛びかかる。

するとお前はおれのまえからさっと逃げる。

逃げてゆく、乱れて流れる髪の毛は

おれにむかってめらめらと燃える蛇の舌だ。

おまえからおれは飛びのいた、おまえの蛇どもから、

すると、振り返り、目に欲情を浮かべて、おまえは立ちどまる。

歪んだ眼差しで―おれに歪んだ道を教え、

歪んだ道の上でおれの脚は―悪意を―学ぶ。

近くにいればおまえを恐れ、遠くにいればおまえを愛

し、

おまえが逃げれば誘われ、求めればおれはすぐむ。

おまえのためならどんなことも喜んで苦しんできた、

苦しんできたのだ。

その冷たさに燃え上がり、その憎しみにさそわれ、

逃げれば縛られ、あざ笑われて―心は騒ぐ。

—おまえを憎まないものがあつたらうか、大いなる束縛するものを、
纏わりつくものを、誘惑するものを、探すものを、見いだすものを。

おまえを愛さなかつたものがあつたらうか、無邪気な、

こらえしよのない、風のように素早い、子供の目をした罪深い女を。

おまえはおれを今どこへ連れていくのか、手に負えないおまえは。

もう、また、おまえはおれを避ける、
可愛い、はすっぱで、恩知らずのおまえは。

おれはおまえをもとめて踊る、どんなわずかな足跡でも探してついで行く。

おまえはどこにいる。おれに手を差し伸べてくれ。
あるいはせめて指だけでもいい。

洞穴と茂みがここにある。

おれたちは迷い込んでしまふに違いない。立ち止まれ。動くなよ。

フクロウやコウモリがとびまわっているのが見えないか。

フクロウめ。コウモリめ。

おまえはおれをからかうのか。おれたちはどこにいるんだ。

おまえは犬どもからこんな唸り声や吠え方をならつたというわけだ。

おまえはおれに向かって白い小さな歯を剥き出しにし、
長い巻き毛のなかから

意地の悪い目がおれにとびかかる。

これが切り株や石を越えてゆく舞踏というもの。

おれは狩人

—おまえはおれの犬に、あるいはおれのカモシカになりたいか。

ないか。

そばに来たな。すばしっこいな、性悪女め。

おまえも疲れたろ。

こんどは上に跳ねる。こんどは向こうへ跳ねるか！

抱いて行ってやろう、腕を肩にかけるがいい。

—なんてことだ、こんどはおれが飛びそこなってころんじまった。

喉が渴いたか、—たしか、おれは何か持っていたはずだ、
でも、お前の口はそいつをうけつけようとしないか。—

おお、傲慢なおまえよ、見てくれ、ころんだおれを、
情けを乞うおれを

—ああ、この呪われた、すばしっこい、しなやかな蛇
するりとすりぬける魔女。

おまえと一緒に喜んで—もっと快い道を行きたいのだ。

おまえはどこへ消えた。だが、顔に感ずるのだ、
おまえの手が触れた二つの跡と赤い斑を。

—静かな、色とりどりの藪を抜けていく愛の小道を。
あるいはあそこの湖にそって、

ほんとうにおれはあきあきしている、

そこでは金色の魚たちが泳ぎ、踊っている。

いつもお前の間の抜けた羊飼いであることに。

おまえはもう疲れたのじゃないか。

だから

向こうには羊たち、夕焼けだ、

こんどはお前が、お前がおれに—悲鳴をあげろ。

羊飼いが笛を吹くときに寝るなんて、すばらしいじゃ

おれの鞭のタクトに合わせて踊ってみせろ、
 悲鳴をあげろ。
 おれは鞭を忘れたか、まさか。
 —忘れるものか—

酔歌

ああ、人よ、心せよ
 深い真夜中が語るものに
 「眠った、わたしは、眠った—
 深い夢から醒めた—
 世界は深い
 昼が考えるよりも深い
 世界の哀しみは深い—
 喜びは—苦悩より、なお深い
 滅びよ、哀しみは言う
 だが、すべての喜びは、永遠をのぞむ—
 —深い、深い永遠を—

七つの封印

(あるいは—それでよし—と—かくあれかし—の歌)

1

予言者なら、
 二つの海にかかる高いくびきのような山を渡る
 あの予言者の精神に満ちているならば、—
 過ぎ去ったものと来るべきものへの間にあつて
 重く垂れ込めた雲のようにさ迷っているならば、
 —あやしげな低地にたいして、疲れて、死ぬことも生
 きることできない
 あらゆるものにとたいして敵意を抱きながら、
 救い出すための光を用意し、
 それでいいと言いい、それでいいと笑う稲妻をはらみ、
 予言をくださったさんばかりの稲光を用意して、

暗い胸のうちに稲妻を、

このようにはらむものは、しかし、幸せだ。

まことにいつの日か

未来の光を点じるように定められたものは山にかかる
重い雲のように長く待たなければならぬ。――

ああ、わたしは永遠を欲望するように定められていた
のではなかったか、

指輪を求めるときには結婚指輪を

――永遠帰帰の指輪を求めようと。

わが子をうませたいと願う女について逢うことはなかつた、

愛するひとりの女は別として、

お前を、ああ、永遠をわたしは愛しているのだから。

お前を、ああ、永遠を愛しているのだから。

2

かつてわたしの怒りが墓をあばき、境界の礎石を動かし
古い石板を叩き割って険しい谷に転げ落としたときに、

かつてわたしの嘲りが黴のはえた言葉を吹き飛ばし

鬼蜘蛛（十字架蜘蛛）には箒として

古い黴臭い墓の小部屋には風として吹き抜けたときに、

かつていにしえの神々が葬られてるところに

わたしが喜びの声をあげながら座り、

いにしえの世界を誹謗した者たちの記念碑のかたわらで
世界を称えながら、世界を愛しながら座ったときに、――

――なぜなら教会でさえ、神の墓でさえわたしは愛する
からだ、

天上がようやく純粹な目で

天上の壊れた透き間から見下ろすならば、

よろこんでわたしは草のように、赤い芥子のように
壊れて教会の上に座る。――

「ああ、わたしは永遠を欲望するように定められていた
のではなかったか、

指輪を求めるときには結婚指輪を

――永遠回帰の指輪を求めようと。

わが子をうませたいと願う女について逢うことはなかつ
た、

愛するひとりの女は別として、

お前を、ああ、永遠をわたしは愛しているのだから。

お前を、ああ、永遠を愛しているのだから。

3

かつて創造の息吹のひと吹きがわたしに訪れたときに、
さらに偶然を強いて星の必然の輪舞を踊らせる

あの天上の苦悩の息吹のひと吹きが訪れたときに、

かつて行為の長い雷鳴が

従順に後を追う

創造の閃光の笑いを

わたしが笑ったときに、

かつてわたしが大地という神々の賭博台で、

神々とともにダイスを遊んだときに、

そのために大地は振動し

炎の河を吹き上げたものだが、――

――なぜなら大地は神々の賭博台であり、

創造的な新しい言葉に震え、

神々の投げるダイスに震える。――

ああ、わたしは永遠を欲望するように定められていた
のではなかったか、

指輪を求めるときには結婚指輪を

―永遠回帰の指輪を求めるようにと。

わが子をうませたいと願う女について逢うことはなかつた、

愛するひとりの女は別として、

お前を、ああ、永遠をわたしは愛しているのだから。

お前を、ああ、永遠を愛しているのだから。

4

かつてわたしが存分に飲んだときに、

すべてのよくませあわされる

あの泡立つ香辛料のあわせ壺から存分に飲んだときに、

かつてわたしの手がかつても近いものにもかつても遠きものを、

精神に火を、苦悩に喜びを、

もっともよきものにもっとも悪しきものを注いだとき

に、

わたし自身があの救いの塩の一粒であるならば、

あのあわせ壺ですべてのものが

ふさわしく混ぜあわされる、――

―よきものを悪しきものとむすびつける塩が存在し、
もっとも悪しきものも

味付けと最後の泡立ちにはふさわしいのだから。――

ああ、わたしは永遠を欲望するように定められていた
のではなかったか、

指輪を求めるときには結婚指輪を

―永遠回帰の指輪を求めるようにと。

わが子をうませたいと願う女について逢うことはなかつた、

愛するひとりの女は別として、

お前を、ああ、永遠をわたしは愛しているのだから。

お前を、ああ、永遠を愛しているのだから。

5

わたしが海に、

海の類いのすべてに好意を抱くときに、

それらがわたしに逆らうとき、とりわけ好意を抱くのだが、

まだ見いだされていないものに帆を上げる

探すという快樂がわたしのなかにあるならば、

その快樂のなかに船乗りの快樂があるならば、

かつてわたしの喜びの音が、『岸は消えていった

—いまや最後の鎖が断切られ落下した—

—限界をとかれたものがわたしの回りに逆巻き

遙かかなたまで空間と時間が輝いて見える、

さあ、いざ、なつかしき心よ』と叫んだときに。—

ああ、わたしは永遠を欲望するように定められていた
のではなかったか、

指輪を求めるときには結婚指輪を

—永遠回帰の指輪を求めようと。

わが子をうませたいと願う女について逢うことはなかった、

—愛するひとりの女は別として、

お前を、ああ、永遠をわたしは愛しているのだから。

お前を、ああ、永遠を愛しているのだから。

6

金とエメラルドの陶酔に浸りながら

わたしが両の足でたびたび跳びはねたとき、

わたしの徳が舞踏家の徳であるならば、

わたしの悪意が

バラの斜面とユリの生け垣に住む笑う悪意であるならば、

―笑いのなかにあらゆる悪意が、

悪意そのものの神聖さによって、

聖化され、解放されて並んでいる―

そして、重いものはことごとく軽くなり、肉体のすべ
ては踊り、

精神はことごとく鳥となり、それがわたしの初めであ
り終わりであるならば、

まことに、それがわたしの初めであり、終わりなのだ
が。―

ああ、わたしは永遠を欲望するように定められていた
のではなかったか、

指輪を求めるときは結婚指輪を、

―永遠回帰の指輪を求めるようにと。

わが子をうませたいと願う女について逢うことはなかつ
た、

愛するひとりの女は別として、

お前を、ああ、永遠をわたしは愛しているのだから。

お前を、ああ、永遠を愛しているのだから。

7

かつてわたしが静かな天を自分の上にひろげ、
自分の翼で自分の天を飛び回ったときに、

わたしが戯れながら深い光の遠いなかを泳ぎ

わたしの自由のもとに鳥の思慮が訪れたときに、―

―鳥の思慮が言ったものだ、

見るがいい、上もない、下もない。

身を投げるがいい、あたりに、外へ、後ろへと、軽や
かなお前を。

歌うがいい。話すのはもうやめるがいい。

あらゆる言葉とは重いものにふさわしく造られてはいないだろうか。

あらゆる言葉は軽やかなものには嘘をつきはしないだろうか。

歌うがいい。話すのはもうやめるがいい。 —

ああ、わたしは永遠を欲望するように定められていたのではなかったか、

指輪を求めるときには結婚指輪を

— 永遠回帰の指輪を求めようと。

わが子をうませたいと願う女について逢うことはなかった、

愛するひとりの女は別として、

お前を、ああ、永遠をわたしは愛しているのだから。

お前を、ああ、永遠を愛しているのだから。

あとがき

これはムザリオン版ニーチェ全集の第二十巻をもとにして一九九九年にチューリッヒのマネッセ書店から公刊された『ニーチェ詩集』の内「ツアラトウストラの歌」を訳したものである。

G. ColliとM. Montinariによる全集の出版以後、ニーチェ研究はそのテキストによるものとなったが、詩集に關しては、ニーチェ自身が詩集としてまとめることはなかったので、ムザリオン版二十巻は今でも大きな役割を果たしている。

ニーチェが没したのが一九〇〇年であるから、このマネッセ版は没後百年記念として公刊されたもので、編者はラルフライナー・ヴーテノウである。

ところで、ニーチェの詩の朗読である「昼夜夢」と題されたCDがデュッセルドルフのパトモス書店から出されている。朗読者はドイツの有能な若手俳優で、舞台、映画、テレビで活躍している一九五七年生まれのルーフ

ス・ベック。一九八九／九〇年の舞台俳優最優秀新人ともいうべきもの選ばれている。背後に音楽が流れているが、それは一九五〇年生まれのクラウス・ブーレルトによるもので、コンピュータミュージックである。

その朗読の中には、ここで訳したものは「醉歌」だけしか含まれていないが、それが核となって、このCDは構成されている。

この朗読を聞いて、『プリンツ・フォーゲルフライの歌』のなかの「詩人の自覚」の一行、

とっさにその尻馬に、私の韻律が打ちまたがる
が即座に思い起される。

時に緩やかに、時に急流となるような、時にささやくような、時に絶望を歌うその自在のテンポ。ニーチェによって「串刺し」にされた韻律が非常に新鮮に身近に感じられる。このような朗読がなされることはニーチェの詩が耳から聞くものでもあることを強く感じさせられる。

訳すにあたってはこのCDのことを念頭において、日本語としても読みうるように、ドイツ語表現として必要であり、あるいはリズムを整えるに必要なものであって

も、日本語の詩語のリズムを考え、削ぎ落としたつもりである。

使用テキスト

Friedrich Nietzsche, „Sämtliche Gedichte“, Manesse-Verlag, Zürich, 1999, Hrsg. von Ralph-Rainer Wüthenow

参考文献

- Nietzsche Werke, Walter De Gruyter, Berlin, 1968, Hrsg. G. Colli und M. Montinari, Bd. VI-1
『ニーチェ全詩集』 人文書院 東京 昭和四十三年 秋山英夫 富岡近雄訳
『ツアラトウストラはかく語りき』 角川書店（角川文庫）昭和四十五年 東京 佐藤通次訳
『ツアラトウストラはこう言った』 岩波書店（岩波文庫）東京 一九六七年 水上英廣訳
『ツアラトウストラはこう語った』（ニーチェ全集第二期第一巻）白水社 東京 一九八二年 園田宗人訳
„TagNachtTraum“, Patmos Verlag, Düsseldorf, 2000, Interpret von Rufus Beck, Musik von Klaus Buhkert